

獅子文六『バナナ』（1959）における社会観察 —バナナ表象が映した昭和30年代—

Representations of Bananas in Shishi Bunroku's *BANANA*: How the Portrayal of Bananas Described the Showa 30s

岸川 あゆみ
KISHIKAWA, Ayumi

摘要

This paper examines the changes in Post-War Japanese society and its interaction with East Asia in the Showa 30s [1955-1964] by analyzing the representations of bananas in the novel *バナナ* [Banana] (1959) written by Shishi Bunroku. Bananas have been consumed widely across the continents, which shows the relations between nations in the context of the global economy and the cultural images.

In Japan, bananas had been imported mostly from Taiwan before 1964 and consumed consistently since the pre-war era. Tsurumi Yoshiyuki traced, in *Bananas and the Japanese*, the process of how bananas were cultivated in the plantations in the Philippines owned by the United Fruit Company and shipped to Japan in the late 1970s to the early 1980s. His work demonstrated how the global economy evolved around the world and how Japan had a part in it during the period of rapid economic growth. On the other hand, despite the high consumption, it has not been explored how bananas were involved with Japanese society after the defeat in the second world war. Shishi Bunroku's *バナナ* [Banana] features the environment surrounding the import of bananas as one of the symbols of the Showa 30s and plays a considerable role in the history of the cultural representations of bananas.

To identify those features, the first half of this article focuses on cultural aspects of bananas such as a banana song besides reviewing the social situation about bananas, and the second half spotlights the political and economic side by paying attention to the adaptation of the actual incidents related to overseas Chinese' import of bananas.

キーワード：バナナ 獅子文六 戦後日本 冷戦 東アジア 華僑

Keywords: Banana Shishi Bunroku Post-war Cold-War East Asia Overseas Chinese

1. はじめに

バナナは、とりわけ19世紀から20世紀にかけて世界中に流通範囲が拡大してきた、生産量の多い果物である(コッペル:2012, pp.9-11)。そうした近現代における流通範囲と消費量の大きさから、バナナの文化表象はグローバル化における生産・消費の権力関係や、政治外交とは異なる地域間のイメージを浮き彫りにするものとして注目されてきた¹。

他方で、日本におけるバナナを対象とした研究では、まず貿易史研究としてバナナ輸入組合の役割を整理した高木(1967)に始まり、近年では、日本統治時代の台湾からのバナナ搬出の実

態を分析した松浦(2016)や、同じく日本統治時代の台湾バナナの流通動向・機構を植民地の「帝国」への包摂過程と捉えた谷ヶ城(2010)、さらに戦前から1972年に至るまでの台湾バナナの対日貿易機構や輸入量推移を明らかにした陳(2010)などがある。さらに、このようなバナナにおける産業史の側面と、冒頭に挙げたような文化的アイコンとしてのバナナの側面を融合させた研究の嚆矢として、米国企業が先導したフィリピンの大規模農園でのバナナ生産に注目し、生産から消費に至る、食をめぐる国際的な権力構造を明らかにした鶴見(1982)がある。このように一時代の経済や政治、社会動向を包括した文化表象としてのバナナに着目した近年の事例としては、高度経済成長期のバナナにまつわる記憶を収集し、当時の日本の社会状況を分析した赤嶺(2013)や、門司港におけるバナナの叩き売りなどの文化事象に触れ、現在の日本における台湾バナナへの懐古を指摘した古関(2021)が挙げられる。

鶴見が対象とした1970年代後半から1980年代初頭は、複数地域からのバナナの流入が主流になるなど、現在にも連なる20世紀後半のグローバル化の進展が垣間見える時代であり、鶴見の研究では、バナナ産業のあり方を介して、国際経済の中の日本社会像が切り取られていた。また、赤嶺(2013)や古関(2021)では、それぞれ経済成長期と21世紀現在の日本社会像の一端がバナナ表象を通して観察されており、いずれもグローバル化を背景に、国内事象としての輸入自由化が象徴する、戦後における経済「自立」以降の日本社会像が対象となってきたといえる。

他方で、戦後日本とバナナに関しては、もう一つの特徴的な時期として、戦後の輸入再開から輸入自由化前の時期がある。植民地支配下の台湾バナナの移入により、20世紀初頭には日本でバナナが流通するようになっており(高木:1967, p.52)、それが戦時の一時流入途絶を挟んで戦後に再開し、輸入制限を伴ったにも関わらず、民間業者による輸入が開始された翌1951年(高木:1967, p.60, p.65)には、輸入量は既に2万トンを超えており、輸入自由化直前の1962年では8万トンまで増加していた²。また、この時期のバナナは、輸入自由化後と異なり、戦前期と同様、台湾からの輸入を主としていた³。つまり、この時期のバナナ産業は、旧植民地とのほぼ独占的取引という戦前体制からの継続を特徴としていたといえる。このような体制下でバナナをめぐる文化表象は、戦後日本社会とどのように結びつきを持っていたのか。

本稿で取り上げる『バナナ』という作品は、日本人の母と台湾出身の父を持つ大学生の龍馬が、友人・サキ子とその父で青果商の島村と共に、龍馬の叔父・天源から譲り受けた台湾からのバナナ輸入ライセンスを利用して、金策に走る顛末を描いた作品であり、まさに輸入自由化前のバナナ産業の隆盛期を描くと同時に、当時の日本の社会状況や風俗を描きこんだ作品である。現に鶴飼(2017)は、この作品を鶴見(1982)に20年ほど先立って、バナナ輸入をめぐる日本社会を描いた作品と評しており(p.426)、従って本作は、日本のバナナ表象史における一里塚といえる。そこで本稿では、当時の社会動向と作中のバナナ表象を対照しながら、昭和30年代半ばの日本社会が、『バナナ』における獅子文六の視点を介したバナナ表象にどのように反映されたのかを考察することで、本作のバナナ表象史における位置付けを検討する。具体的な構成と

しては、前半で当時の日本社会におけるバナナを巡る社会状況を整理しつつ、バナナを巡る文化事象に注目し、後半では東アジアにおける政治・経済動向との関連を中心に分析を進める。

本稿の意義としては、上述のバナナ表象研究の視点に加え、特にバナナ貿易という切り口が在日台湾人華商家族の戦後描写に通じている点からも、戦後日本で検討が不十分な戦後日台関係研究、また広くは東アジアの文化交流史研究に資する可能性を持っている。さらに、日本文学の観点でも、獅子文六研究における意義がある。獅子は近年再評価が進み、日本社会の風俗描写に優れることで知られるが、戦前の作品にも「ナショナルなものを、インターナショナルな観点からとらえるセンス」(花田:1970, p.400)という評があるように、国際的視野からの社会観察の力量を持つ作家でもある。そうした観察眼は、上述の鶴飼の評に見るように、戦後の『バナナ』でも現れていると考えられ、獅子の国内外への観察眼の再評価にも繋がると思われる。

2. バナナ表象をめぐる4つのイメージ

2. 1. 当時の日本におけるバナナ・イメージ

2. 1. 1. 時代を象徴するバナナ表象

獅子文六は、『バナナ』(1959)の執筆時期の前後、約10年の間に他に2つのバナナ表象を主題とした随筆「バナナ禅語」(1950)と「バナナの皮」(1961)を描いている。それらの作品において、バナナは獅子自身の戦前から戦後へ続く時代の記憶を託されている。獅子とバナナの付き合いは古く、少年期の記憶として、「バナナが私を熱狂に導いたと考えられるが、あまりにもバナナを好み過ぎた」(獅子:1950, p.151)という描写も見受けられる。獅子自身は、横浜の商人の家庭に生まれ比較的裕福であったことから、1910年頃には、東京ではまだ普及していなかったバナナを口にしていた(獅子:1961, p.34)。バナナは1903年頃から商業目的で植民地の台湾で栽培されたものが内地に移入され始めており、獅子が挙げた時代の頃から大量移入が始まった。

高価な品という点に加え、バナナのもう一つの印象が、異国から来る食べ物、というものだ。獅子は上記の随筆で、当初バナナが一般に近隣の中華街で売られていた記憶から、異国の味という印象を伴ったことを描き出しているが、これは獅子だけの記憶ではない。鶴見(1982)も同様の見解を示しており、日清戦争、日露戦争間の外国文化への関心が高まった時期にバナナの流入があったことを指摘している(pp.3-4)。とりわけ、台湾という南方の植民地からの移入が主であったことで、バナナはいわゆる「南洋」への憧れに取り込まれていったといえる⁴。

2. 1. 2. ノスタルジックなバナナ

こうした戦前における異国情緒を伴ったバナナのイメージは、戦後においても残存し続けた。『バナナ』が描かれた1959年頃までを見てみると、1章で述べたように、戦後に輸入品として再び国内市場への供給が始まったのは1950年頃のこと、一貫して台湾からの輸入が主であった。輸入量は次第に増加傾向にあったが、植民地支配下の台湾からの移入だった戦前・戦中

とは異なり、1964年の輸入自由化までは高価な品だった(森永:2008, p.58)。こうした戦後にかけての一時途絶、また供給量の変化から、昭和30年代頃まで、バナナは戦前の記憶と結びついていることがしばしばあった。一例として、『美しい暮らしの手帖』(1948)の投稿には、ビール、ビフテキ、バナナを「我々がこのニホンでこれを思うままに楽しめた日も遠い昔にはあつたのである。」(兼常:1948, p.37)と、戦後と比べ戦前の豊かな食生活の象徴とする内容が見られ、バナナは戦前の生活を好ましい記憶として描き出す際の象徴の一つとして機能していたといえる。

このように、戦後においても、戦前の味覚の記憶を色濃く残していた台湾バナナであるが、『バナナ』が執筆された1959年頃は、こうしたバナナ像の時代にあったといえる。当時のバナナを取り巻く状況を見ると、バナナは果物輸入額の9割を占め、基本的に高価でありながら値下げ品は一般家庭にも普及しており(『朝日新聞』1957.7.27朝刊)、日本におけるバナナ消費熱が窺われる。さらに、輸入自由化前だが輸入量が過去最多となった時期であり、後の視点からすれば、バナナが「特別な輸入品」である最後の時でもあった。

2. 2. バナナの持つ象徴性

それでは、こうした巷のバナナ像を踏まえて、獅子が端的に『バナナ』と題した作品を描いた真意は何だったのか。当時も正宗白鳥が、既に著名作家であった獅子による非常に簡潔な題目に関心を示していたが(『読売新聞』1959.9.12夕刊)、この題名は、それ自体が注目を浴びた。

『バナナ』は、1959年2月19日から1959年9月11日まで、読売新聞朝刊に204回連載された。獅子は、連載開始前の挨拶で、その連載意図を「誰もムリをしてる世の中」で、「バナナは日本でならない果物なのに、日本人はバナナ好きで、バナナなしに、生きられない様子である。これも、ムリの一つである。そのようなムリを、私もムリしながら書いてみたい。」(『読売新聞』1959.2.14朝刊)と述べている。ここで、獅子はバナナを日本社会の「ムリ」の象徴としている。当時の新聞連載小説は特に時事を捉えることに重点を置いたとされるが(広岡:2014, p.34)、『バナナ』も「作者の犀利で、時流にこびない、筋金の通った文明批評、社会批評がよく出ている。」(『読売新聞』1960.1.14夕刊)と、その社会観察の鋭さが指摘されていた。

では、『バナナ』における、バナナ表象が示した日本社会の「ムリ」とは、どのようなものだったのか。本稿では、『バナナ』におけるバナナ表象という主旋律と重ねられた、食通、シャンソン、在日台湾人、不正輸入事件という4つのキーワードに注目して、次章から検討してゆく。

3. バナナと食道楽、そしてシャンソン

3. 1. 食道楽の嫌うバナナ

3. 1. 1. 獅子文六のバナナ嫌い

獅子は、バナナを主題化したことに関して、「私は、バナナとはオカシなものだと思って、小説に書く気になったのである。」(獅子:1961, p.33)と、後に語っている。2.1.1.で見たように、獅

子は少年時代に熱狂的にバナナを好んだが、後に敢えてそのバナナを嫌いになろうとしたことが、先の随筆の中で繰り返されている。1950年では、過度な執着を良しとしない個人的な戒めがその理由として語られるが、一方で『バナナ』の連載を経た1961年では、変化が見られる。そこで獅子は、戦後に食べたバナナを「果物として下等な味がすると判断する。」(獅子:1950, p.150)と、少年期のバナナとは一転した形で描写し直している。その背景として描かれたのは、国際情勢の変化に伴って輸入状況が次々変化してきたバナナ像であり、ここに至って獅子の唐突な「バナナ嫌い」が、個人的嗜好の変化というよりも、戦前から戦後への時局の変化という社会的な要因を示唆するものであったことが見えてくる。『バナナ』は、獅子自身がそうした「バナナ嫌い」と向き合う過程で描かれた作品といえる。2章で先に挙げた、一般的なバナナ像に近かった少年期におけるバナナ像に対して、この作品で獅子は、新たにどのようなバナナ像を提起しようとしたのか。この点はまさに、先に挙げた小説執筆動機のパナナの「オカシ」さに繋がっているといえるが、3章ではこの「オカシ」さが、何を意味したのかを考察する。

3. 1. 2. 天童におけるバナナ嫌いの意味

そうした「バナナ嫌い」の獅子の代弁者となっている人物が龍馬の父・呉天童である。戦前の学生時代以降を日本で暮らしてきた在日台湾人華僑⁵の天童は、食に関する随筆家としても著名だった獅子自身同様、「食道楽」という設定が強調される。彼の行動動機は多くが食に基づいたものだった。この背景には、冷戦下における天童の特徴的な国際観が見え隠れする。例えば、天童は居住地や国籍に関して、国家間の対立に巻き込まれないために日本、アメリカ、果ては宇宙にも旅立つという(『バナナ』, p.13)。その背景として、天童の思想の核心には「わたしは個人の和平を、どこまでも守り切って、生涯を送りたいのだ。」(同上, p.322)という、国家間の対立と対比する形での「個人の和平」が構想されている。最終盤では、息子の代わりに刑務所へ向かう際、超然と希望する食べ物を列挙する姿が描かれるが、この章の題は「我們熱愛和平(我々は平和を愛している)」となっている。つまり、こうした国家・政治に対抗的意味合いを付加された「個人の和平」の具体的な形が、「食」への執着として表出しているといえる⁶。

こうした食への思いの一方で、天童はバナナを嫌うが、理由の一つは次のように描写される。

天童には、バナナは下賤で、且つ、危険な果物であるという考えがあった。彼はバナナの産地である台中市の近くで生れ、バナナが一本一銭以下の最も下級な果物であることを、知っていた。(『バナナ』, p.21)

ここからは、少年期を過ごした日本統治下の台湾では、大量生産されるバナナは特別な品などではなく、日常の一部として天童の中に位置づけられていることが見えてくる。台湾のバナナ栽培自体は植民地期以前からあったが、総督府の管理下で品種改良が行われ、内地向けの大量

生産が始まった。実際に、当時は台湾現地で食べられるバナナより内地移出向けが多く、1916～1940年頃まで、生産量に占める内地向け移出は概ね60～70%前後を占めた(陳:2010, p.160)。こうした生産側である植民地でのバナナ表象は、2.1.2.における、日本で一般的だった、懐古的でロマンチックなバナナ表象とは対照的なものとして描き出されていることが鮮明である。

さらに、天童がバナナを嫌うもう一つの理由は、「バクチのような」(『バナナ』, p.127)貿易形態にある。これは、1948年頃にバナナ貿易が再開して以降、輸入ライセンスが抽選方式だったことを示唆している。この方式は、独立国家間の標準である自由貿易に対し、政府が輸入制限に介入する保護経済の代表格であり、戦後体制の継続を象徴していたといえる。

つまり、一つ目の戦前の植民地での生産にせよ、二つ目の戦後の外貨割当制の貿易にせよ、バナナという食物には国家・政治の関与が極めて大きかったことが強調されている。このようなバナナの姿は、国家・政治と対抗的な位置に食を置く天童の認識と対比されることで、実際には日常の食の中にも政治の関与があり、むしろ戦前から戦後に至るまでバナナが常に政治性を帯びてきたことを強調する効果を持っていたといえる。

3. 2. シャンソンが唄うバナナ

3. 2. 1. ロマンチックなシャンソンとバナナ

龍馬の友人・サキ子は、バナナと一風変わったかたちで繋がりを持っている。それは、シャンソンを介したもので、次のようにサキ子がシャンソン歌手として唄う場面が終盤にある。

その皮は青けれど
 身は朽ちて、けがれたり
 その眼ざしは清けれど
 心はさすらいの娼婦に似たり
 ああ、青ブクのバナナ
 バナナは黄なるこそよけれ (『バナナ』, p.221)

「青ブク」とは、輸送中に外皮は青いまま、中身のみが熟しすぎて腐り、売り物にならなくなったバナナを指す。つまりは、即興詩でバナナをテーマとしたシャンソンを唄うという一幕であったわけだが、これが終盤のメインの一つに置かれたことにどのような意味があったのか。

まず、シャンソンは、作中でどのような存在として登場したのか。当時の巷のシャンソンのイメージが他の人物を介して描かれている。一つは、天童の妻・紀伊子という中流層の女性の視点だが、有閑マダムが集うサロンでの共通言語としてシャンソンに触れ、戦前の少女時代からの憧れと相まって、ロマンチックな西洋文化の象徴になっている。また、日本人歌手や業界人が登場し、同様にシャンソンを西洋文化の教養を持った「インテリ」のイメージで喧伝し、

戦後文化人としての権威に利用しており、滑稽な存在として描かれる。当時の日本は、シャンソン・ブームの渦中で⁷、戦前に確立された高尚なイメージを保ちながら、ラジオやシャンソン喫茶を介して、より商業化する過程にあった。このような戯画化は、戦前にフランスに滞在し、本場のシャンソンを見てきた獅子⁸にして、更新されない戦前からのイメージとその利用を日本社会の「ヘンテコ」(『バナナ』, p.36)として提示する切り口だったといえる。

この点については、バナナにも似通ったイメージが付与されている。当初、サキ子自身にとってのバナナも「熱帯の愛嬌者」という「詩心をそそる」(同上, p.64)対象であり、紀伊子にしても、バナナを「恋愛」に準えており、植民地での生産を間近に育った夫・天童のバナナ表象に比べると、より空想的であることが見えてくる。さらに、青果仲買人の島村にとってのバナナはまた異なる意味でのロマンチックな感情を投影されている。「バナナ師」(バナナ専門の青果商)であった過去を、島村は「戦争前にア面白く世の中を送った」(同上, p.67)と称して理想化し、その過去への回帰を戦後も望んでおり、人生の再起というロマンが、バナナという戦前の栄光の象徴と重ねられている⁹。これらの戦前由来の空想的なバナナ像にしても、それはシャンソンを巡るイメージと同様で、2.1.2.で見てきたような当時の巷のバナナ像に近い物であった。

3. 2. 2. サキ子にとってのバナナ表象の変化

3. 2. 2. 1. シャンソニエの唄ったバナナ

上記のような、当時の日本社会におけるシャンソンとバナナの戯画化はともに、戦前の憧れがそのまま消費されている戦後への皮肉と結びついていたが、作中では、サキ子を介して両者が重なり合いながら、そのイメージに変化がもたらされている。

サキ子はシャンソン歌手として、フランスの女性歌手ニコル・ルビエの経歴に憧れたことが示されており(『バナナ』, p.31)、自立した、多才な文化人としての女性像を理想としていることが窺える。サキ子は公演に際し、舞台用ドレスを拒否し、普段着を纏う。こうした服装への姿勢も、やはり作中で「戦後のパリの芸術的フンイ気」(同上, p.158)の代表として言及される、女性歌手ジュリエット・グレコの影響が見える。グレコもまた、サルトルらとの交友で知られ(蘆原:1985, pp.129-130)、ボヘミアンなフランス青年の若者文化を象徴する存在であった。さらに、サキ子の公演はその客層も異例で、青果会社の社員やその家族を前に披露することになる。この客たちは島村が同僚たちを動員したもので、「あたシア、シャンソンてやつは、始めて聞くんだが、面白えかい」(『バナナ』, p.213)など、シャンソンとは縁遠いことが示される。つまりはシャンソン愛好者として想定された紀伊子のような中流層と対比されているといえる。

こうしたサキ子の姿勢は、先述の巷のシャンソン・イメージからすると、日本で受容されてきたシャンソンの型を破る物として描かれたことが明らかだが、では、この「型破り」という点に具体的にはどのような意味があったのか。それが見えてくるのが、サキ子の歌に対する世間の評価だ。サキ子は原語のフランス語で既存の一曲を歌い終えるが、フランス語を解さない

客たちが無反応な様を見ると、二曲目を 3.2.1. に引用した「青ブクの歌」という日本語の即興歌に切り替える。これは、「無題」の歌を歌うことで日本における巷のシャンソン一般に抵抗するつもりだったサキ子が、眼前の観客に訴えるように歌う、という明確な抵抗の形を見つけたことを意味する。歌いかけるべき対象をサキ子が意識する契機は、客の青果市場の人々から贈呈された、「マンモス的なバナナの枝」(『バナナ』, p.220)で作られた型破りな花輪にあった。サキ子の目には、この地に足のついた力強さに溢れるバナナが「花よりも美しかった」(同上, p.220)と映る。これは、高嶺の花だった巷のバナナとは対照的な姿であり、そうした従来と異なるバナナの姿が、巷の畏まったシャンソンへの対抗と重ねられている。

結果として、「青ブクの歌」は好評を博すが、その評価の重点は「青ブク」という言葉を含んだ歌詞が、「今の日本に、青ブク的存在が、充滿しているためかもしれない。」(同上, p.222)と、時流を捉えた象徴的内容として受容されたことにあった。シャンソンにおいて歌詞が占める位置づけについて、作中の評論家はサキ子(芸名:紫シマ子)を激賞し、「日本の全部のシャンソン歌手は、唄う(シャンテ)ということばかり考えて、語る(ディール)ということをも、まったく、疎かにしている。しかし、紫シマ子君は、語っているよ。」(同上, p.222)と強調している。この指摘からは、日本では型破りなサキ子のシャンソンが、フランスのシャンソンの対照として描かれていたことが見えてくる。フランスでのシャンソンは、絶対王政期でも禁忌なく政治風刺を唄えたことが起源の一つであり、その精神は現代も引き継がれ、1881年に開始されたパリの新聞のコーナー『日々の歌』が打ち出した、「政治・社会の時事問題をシャンソン形式で批判的に取り扱う「日常シャンソン」というジャンル」が20世紀以降のシャンソンの流れを形作ってきた(グロイル:1983, p.64)。この流れから、現代でもシャンソン精神を象徴する歌手「シャンソニエ」の条件となるのは、時事を風刺する歌詞を自作できる点である(蘆原:1985, p.61)。つまり、サキ子が時事を捉えた即興詩を歌う点が強調される展開は、中流層の嗜好品として扱われる日本の巷のシャンソンに対し、実際にはそれが政治・社会状況への鋭い視点と切り離せない文化であることを指摘しているといえる。

3. 2. 2. 2. 女性パフォーマーのバナナ歌曲からの変遷

さらに、サキ子において冒頭のイメージからの変化が描かれるのはシャンソンだけではない。サキ子がシャンソニエになる過程では、冒頭の嗜好品としてのバナナ表象も、最終的に自身の選択で社会を「語る」象徴へと変化を遂げている。

バナナのイメージが歌われる或いは踊られること、それも女性によってパフォーマンスされることには、それ自体に歴史的背景がある。象徴的存在として、バナナを帽子に盛り付けて登場した“*The Lady in the Tutti-Frutti Hat*”(1943)、“*Chiquita Banana Song*”(1944)など、複数のバナナ表象を纏ってきたカルメン・ミランダや、その系譜の原点として、1920年代フランスで、バナナの腰蓑を纏って「バナナ・ダンス」を演じた北米出身のジョセフィン・ベイカーがいる。

前者については、そのバナナと重ねられた南米女性の異国情緒イメージが同時代の北米の植民地主義の矛先を逸らすのに一役買い(Enloe:2014, p.222, pp.254-255)、後者でもベイカー自身がバナナに重ねられ、「未開」或いは蠱惑的イメージを付与されたことが指摘されている(猪俣:2006, pp.65-66)。両者に共通するのは、帝国主義における支配者と被支配者の関係性が反映されたジェンダー観を背景に、パフォーマンスの中でのバナナの意味合いが、パフォーマーである彼女たち自身の主体的構築とは見做されなかったことだ。獅子は、1920年代のフランス滞在時にベイカーの公演を見ており、自身の若年期のバナナ表象に強く結びついたと述べている。

「私は、彼女が舞台上で唄った文句の冒頭を、まだ覚えている。シェー・ヌウ、イリヤ・デ・バナーヌ……。これは「わしが国さによ、バナナがござる」と訳するのが適当だが、黒人の女の唄の文句として、面白かった。バナナはフランスになく、アルジェリアか、アフリカか、植民地から移入されるのだが、黒人の女のお国自慢には、多少のワイセツの意味も加わっていた。」(獅子:1961, p.34)

獅子の目に映ったベイカーのバナナ表象にしても、パリで安価だったバナナと重ねて見ており、その印象にはやはり戦間期フランスにおける植民地主義の影響が色濃い。しかし、獅子の眼差しはここで終わらなかった。原産国ではバナナが最下級の果物でありながら、移入先のフランスではそれがお国自慢として描かれることを「滑稽」(同上, p.34)と言い表しており、帝国主義のもとでの生産構造の捩れを喝破しているといえる。こうした主張はまさに、天童のバナナ表象に反映されたことがわかるが、同時に戦前にベイカーらが押し付けられた植民地主義的思考の内側で形成されたバナナ表象への対抗でもある。

これを踏まえると、サキ子がバナナを唄うことは、対抗的イメージとしてさらに積極的意味を持っていたと考えられる。つまり、サキ子は政治や社会状況に対する主張を行うシャンソニエの形式を借りて、バナナをその媒介として主体的に選び取り自らの主張に活かしていた。これは、ベイカーら女性パフォーマーたちのバナナ歌曲が経てきた受動的なバナナ表象に対して、パフォーマー本人の意思を強調したものであり、獅子自身がベイカーのバナナ・ダンスを見た際の感慨から対照的に生み出されたバナナ表象であるといえる。

3. 3. 日本社会におけるバナナの「オカシ」さ

3. 3. 1. 「青ブク」の日本社会

それでは、そのサキ子のシャンソニエとしてのバナナ表象において、人々が社会風刺として捉えた、肝心の「青ブク」のバナナは具体的にどのようなことを意味していたのか。3.1.2.で触れた、バナナ輸入を巡る当時の状況に立ち返ってみると、その保護貿易のシステムとはまさに国家としての自立に至らない段階を象徴するものであり、それゆえに青ブクの外見の未熟さと

重なって見えてくる。それと背合わせに、内面の古さとしては、日本人に見られるバナナ表象が「戦前の栄光」を背負い、さらに戦前に有閑文化として確立したシャンソンの西洋に対する憧憬も残存しているなど、戦前のものの見方からの変化がないことが浮かび上がってくる。当時既に、「もはや戦後ではない」(1956)という経済白書の宣言から数年が経過していたにも関わらず、戦後体制どころか戦前までもが残存していることが示されたといえる。

こうした中身の古さは、古いという指摘だけでは特に意味はないが、作中ではその負の影響が指摘されている。天童は、甘美な日本人のバナナ像に対して、現実を見ない点を揶揄していたが、より直接的な形で「君に限らず、日本人は、空想好きで、戦争の空想に酔って、シクジッタと思うと、今度は、平和の空想を始めて、われを忘れてる。」(『バナナ』, p.291)と述べている。これは、世界構図の把握に関する戦前からの日本人の杜撰さや観念的な現状理解への批判ととれるが、より重要なのは、戦時へ向かった構造が当時も見られたことへの批判になっている点だ。このような、外見は戦後に独立したばかりだが、中身は戦前を残存させているという青ブクの日本社会と重ねられた変動の激しいバナナ像と、それに追いつかない日本人の姿こそ、獅子が執筆動機に挙げたバナナの「オカシ」さの一つであるといえる。

3. 3. 2. 食道楽のバナナ嫌いと言葉の唄うバナナの共通点

そして、作中に見られるもう一つの「オカシ」さは、天童とサキ子に共通した、政治との距離という点に現れている。これも、世の変化に疎い日本人像に繋がっているが、こちらはより当時の情勢との関連が強かったと考えられる。作品構想が始まった1958年初頭は、輸入を巡る東アジアとの関係が大きく揺れ、日本にとっての冷戦課題として浮上していた時期でもあった。

1958年に、日本側は国交のない中華人民共和国と第4次日中民間貿易協定に調印した。経済関係の進展が見込まれたが、結局は台湾側の抗議やアメリカの懸念等から貿易協定は事実上停止している。対米協調という冷戦下における「戦後」の方針に依拠しつつ、一方で東側の中国との関係も再開しようという意図があったが、同時にそれは日本側にとって必ずしも政治外交上の課題ではなかった。中国側では政治解決が本格的経済関係再開の絶対条件であった一方で、日本側が重視したのはあくまで経済関係で、それは民間貿易の推進という方針にも現れていた。この日本側の姿勢は、明らかに政治懸案を棚上げにしているが、具体的には冷戦下での立ち位置や、戦中の関係性の清算を切り離すことを意図していたといえる。

『バナナ』では、天童におけるバナナ表象の政治・外交の媒介物としての側面の強調やサキ子におけるバナナ表象を介したシャンソンの商業化批判と社会風刺への回帰を通して、こうした同時期の日本の姿勢が示唆されていたと考えられるが、その結末もまた政治外交と向き合う方向には進展せず、商業化したシャンソンと一線を画す、社会風刺に辿り着いたサキ子も結局のところ、収入が高いことを理由にバナナ貿易をはじめとするビジネスの道を選ぶ。「シャンソンだって、バナナだって、似たような嗜好品だよ」(『バナナ』, p.234)と述べられたように、

政治の現状に対する軽視を揶揄したはずのシャンソンもバナナも、消費される「娯楽」へとその位置づけを戻してゆく。その背景には、冷戦という国際情勢をよそに、既に踏み込み始めていた、国内における経済成長に邁進してゆく高度経済成長期初頭の予兆があったといえる。

4. バナナと在日台湾人、そして不正輸入事件

4. 1. バナナと在日台湾人華僑像の結びつき

4. 1. 1. 史実のバナナ不正輸入事件からの着想

バナナがさらに具体的な形で描写されるのが、天童の息子・龍馬によるバナナ貿易を巡る後半の展開である。大学生の龍馬は、叔父の天源から譲り受けたバナナ権益で台湾との小規模なバナナ貿易を行うが、別の華僑からの教唆を受けて「外国為替及び外国貿易管理法」に違反したことで、警視庁に連行される。この顛末は、「バナナと下痢」と題されており、台湾生まれの天童の言うところの、バナナの「現実」を表すものとして扱われている。作中で重要な位置を占めるこの事件は、獅子の創作ではなかった。「ちょうど、先年の全バ連事件の小さなケースに、当るらしいのです。」（『バナナ』, p.316）と言及があるが、まさに1956年から4年間ほど報道された実在の事件がモデルだった。それでは、『バナナ』では、この実在の不正輸入事件を同時代の社会事象のどのような側面を表すものとして掬い上げ、作中において位置付けたのか。

実際の事件の概略は、1956年に全バ連（バナナ輸入統括組織）が、割り当てで輸入したうち傷んでいた分に関して台湾商社から追加輸入した際に払った日本円が、当初の規定を超過した不正支払いとなり起訴された、というものだった（『朝日新聞』1960.10.4夕刊）。当時のバナナは贅沢品とされ、戦後日本経済の不安定性から外貨の出入を管理するために、日台通商協定調印後の1950年から採られていた外貨割り当て制度が適用されていた。割り当てを受けるには政府との交渉が必要で、全バ連はその便宜を図るために設立された団体の一つだった（高木:1967, pp.149-151）。当時は特に、割り当てを巡り団体間が鎬を削った頃だった（高木:1967, p.77, p.156）ため、当時の世評では、この事件は敗戦後の輸入規制を背景とした、日本内部の官民が結びついた汚職事件として位置付けられたことが確認できる（『朝日新聞』1957.8.31朝刊）。

しかし、作中の再現では、日本政府や日本の輸入業者の汚職として描かれず、在日台湾人華僑の視点から再構成された。確かに事件の続報では、取引先の台湾側業者も同様の罪に問われ、代理店の華商らが逮捕されている（『朝日新聞』1957.11.28夕刊）。当時の紙面では、日本の汚職問題という解釈に華商逮捕の要素を加えて見解を組み直す評は見られなかったが、ではなぜ、本作では敢えて在日台湾人華僑の側からバナナ輸入とこの事件を描くことになったのか。

4. 1. 2. 経済的手段としてのバナナ

4. 1. 2. 1. 華商のバナナ貿易が示す戦後に至る変化

バナナ輸入に関わる在日台湾人華商像として描かれたのが、龍馬に輸入ライセンスを与える、

天童の弟・吳天源である。彼にとってバナナは経済的手段であり、天童同様、日本人の登場人物たちが当初持っていた観念的なバナナ像と一線を画すものだった。

こうした差異が描かれた理由として、在日台湾人華僑側から見たバナナ貿易の流れが、戦後にかけての旧帝国と旧植民地の立場の逆転を如実に反映するものであったという背景がある。天童が生産地側の視点から、バナナをより「現実的」に見た点を指摘したが、商売に携わる天源ではそれはより顕著に描かれる。例えば、戦後間もなくの華僑の商売は、「濡れ手に粟のつかみどりをやって、誰も儲けた時代」(『バナナ』, p.11)と表現される。これは、敗戦後の日本で、在日台湾人を、華僑登録を通して戦勝国民待遇する措置がとられたことが背景にあり(何:2015)、まさに立場の逆転を象徴する現象の一つだった。

さらにバナナ貿易に関してはその成功には、戦勝国民という立ち位置に加えて、台湾との直接のパイプを持つことで優位に輸入ライセンスを取得できたという経緯があった。戦時下で途絶えたバナナ輸入の再開は、台湾側の主導で駐留米軍と契約して、軍用物資として輸入することから始まった(高木:1967)。獅子自身も、戦後に食べたバナナが、その余分だったことを記しており、こうした動向を感知していたことがわかる(獅子:1961, p.35)。この戦後の経緯からして既に、台湾を植民地化した日本側が内地向けにバナナ産業に介入した戦前の経緯とは逆転したものだ。のちに日本政府は外貨割り当てを始めたが、この制度でも割り当てには一定品目物資の輸出が条件だったため、輸出入業者両方の性格を併せた在日台湾人華僑が大半を獲得した(高木:1967)。バナナ貿易で在日台湾人華僑が圧倒的に優位な構図は、このように主に輸入自由化前の昭和30年代前半における、経済主体として不安定な戦後の状況を象徴したといえる。

こうしたバナナ産業の戦前から戦後にかけての詳細や歴史的背景は、作中においても、戦前からの青果商である島村によって、龍馬へのバナナの船着場を含む青果市場の紹介の場面で詳述されている(『バナナ』, pp.60-72)。龍馬への解説という形を取ってはいるものの、こうした長々とした説明にかなりの紙幅が割かれているのは、バナナ産業の歴史的経緯がこの作品の軸の一つであることを物語っているといえる。島村が龍馬をバナナ貿易に参入させようとするのはまさに、上述のような経緯から在日台湾人華僑である天源の持つライセンスを頼みにするという構図が生じていたからであるわけだが、3.2.1.で言及したように、戦前の栄光を再び享受するという姿勢でバナナに入れ込む島村に対し、天源から見た日本のバナナ市場は「日本人は、あの甘い香りの果物にまっ黒になってタカってくる蟻のようなものだった。」(同上, pp.93-94)と描写され、バナナ輸入を数ある商売の一つとしか見ていない華僑との落差が強調される。

ここでも、バナナ貿易を行う在日台湾人華僑の視点に託されるのは、戦前から戦後に至る立場の逆転を介した明らかな時代の変化である。対比される島村はといえば、バナナ貿易を自由に仕切る人物を「バナナ天皇」(『バナナ』, p.71)と準え、戦前・戦中の記憶をほぼ持たない世代の龍馬に問い返されるなど、時代認識の古さが際立つ。さらに、そうしてバナナ利権のために龍馬を懐柔する島村の本音もまた、小説の語りによって「台湾が日本の領土であった頃に活

躍っていた彼は、バナナは自分達の物と、とかく思いがち」（同上, p.70）と、淡々と分析されている。つまり総じて、バナナへの語りは、そうして戦前にとどまり続ける島村の時代感覚を批判的に炙り出すものとして描かれているといえる。

しかし、戦後の市場変化を主導する立場にある在日台湾人華僑の天源の目には、そうした日本側の業界のバナナ、そして戦前への執着自体が既に看破されており、戦後に至る変化を直視しない滑稽さとして映し出されるという構図がある。これはまた、戦前から戦後に至る変化が社会の中で浮き彫りになっていた時代としての1950年代を象徴するバナナ像といえる。

4. 1. 2. 2. 越境する華僑像という理想

天源がバナナ貿易を扱う立場から、時局の変化を鋭く読む人物として描かれるもう一つの背景にはさらに、獅子が商人としての華僑像に持った理想像があると思われる。天童とは違い、天源は戦後に商機を求めて来日した商人であり、商売人としての華僑の側面が誇張されている。

天源の行動原理は、「一体、法律ちゅうもんは、商人に都合悪うでけとるが、ことに、為替や貿易管理法は、アホらしゅうて、話にならん。」（『バナナ』, pp.326-327）という言葉に見るように、商売とは国を超えて行われるものであることを重視しており、一国の法がそれに制限を加える保護貿易には異を唱えるというものだ。この姿勢には、経済至上の面が含まれる一方で、先のように、例え儲けの大きいバナナ取引のような商売であっても、利権闘争に巻き込まれる予測があれば必ずしも利鞘を重視しないという、時流への確かな洞察力が同時に現れている。こうした時代や社会の変化への鋭い判断力を持つという点は、既に述べたように、『バナナ』において日本人の登場人物と対比される形で、在日台湾人華僑に託されている傾向がある¹⁰。

獅子が、バナナ貿易を巡る在日台湾人華僑像をそのように描くに至ったのは、バナナ貿易から時代を遡った時に、戦前からのグローバルな商人ネットワークを持つ華僑像にその原型を見出したからであると思われる。それが如実に現れているのが、作中で天源の理想像という形で名前が出される呉錦堂という戦前の関西で名を成した華商への言及だ。作中での錦堂は「日本人の実業家に真似のできぬ大胆さと、ネバリを見せた」（『バナナ』, p.99）と描かれ、主に日中を往来して両国の生産・需要の流れを把握し、商機を逃さなかった時流掌握の巧みさが評価されている。実際に、錦堂という人物は孫文とも面識があり、辛亥革命支援にも関与して日本の外交文書にも記録が残るなど、日中の財政界で影響力を持った人物とされる（中村：1990, pp.32-33, p.57）。獅子は、戦前作品の「東は東 *parodie*」（1933）においても、中国人の登場人物を日本社会を俯瞰する立場に配してきた¹¹が、『バナナ』の天源は、貿易商として経済を軸に越境する性質、言い換えれば、国境を超えて「海の上に浮かんでる中国人」（『バナナ』, p.322）であることによって、情勢把握に長けるという点がより強調されている。つまり、『バナナ』における、バナナ貿易に携わる在日台湾人華僑は、戦前から戦後への時代の変化を指摘すると同時に、越境する存在であることで同時代の情勢を俯瞰する立場を前提として託されたといえる。

4. 2. 越境を阻まれる契機となるバナナ貿易

4. 2. 1. 一国家の枠を越えてゆく可能性として

そうした越境する華僑像を継ぐ一方で、先述のバナナ不正輸入事件を介して、その俯瞰的な立場から外れてゆくのが、呉龍馬である。龍馬は、在日台湾人華僑の父・天童と日本人の母のもと、日本で生まれ育ち「気分的には、百割の日本青年」(『バナナ』, p.14)である一方、中国籍であることから「彼は半日本人であり、一種の無国籍者である。」(同上, p.180)と表現されている。結果として龍馬の場合、バナナはこうした「海の上に浮かんでる中国人」(同上)であることから来る「無国籍」性と背合わせのものとして描かれる。この「無国籍」とは、日本国籍を前提とした表現ではあるが、作中では肯定的な意味合いが押し出される。この肯定的側面として取り上げられるのが、「あんたなら、どこの国へでも、スッ飛んで、商売やっていけるわよ。」(同上, pp.288-289)というサキ子の言葉に見られる、華商としての越境性だ。

こうした点は、天源においても共通して見られたものだが、なぜバナナ貿易の不正輸入事件に関わる背景として、龍馬における「無国籍」性が度々強調される必要があったのか。上記の「無国籍」性への肯定的評価も、同年代の日本人であるサキ子自身の移動の自由と対比する流れで描かれたが、これはその描写の先に対比として当時の日本が意識されていたからだといえる。当時の日本は、戦後の独立を経て、1956年には国連に加盟しており、戦後の国際社会への復帰を果たして間もなかった。獅子は、『バナナ』執筆前の1955年に戦前の渡航以来初めて、パリを再訪した際に感じた国際観を書き残しているが、そこでは戦前と比べて、華僑の国際的影響力の勃興とそれとは逆に「墮ちた」(獅子:1955, p.27)日本が言及されていた。『バナナ』における龍馬らの越境性は、この感慨の延長線上にあるといえる。つまり、戦後の新秩序のもとで、国際間を渡り歩くのに未だ不自由であった日本が獅子の念頭にあったと考えられる。

4. 2. 2. 華僑という対比が映す日本像

4. 2. 2. 1. 規制付きの貿易と越境の不自由

それでは、そのように時代の大局を見極めながら越境する存在として描かれた華僑である龍馬が、なぜ先に挙げたバナナ不正輸入事件で逮捕されるに至るのか。4.1.1.で示した問いに立ち返ると、まず実際の事件の性質がどのように取り込まれたかという点から始める必要がある。

実際の事件では、日本側のバナナ商が政府による割り当て制限を超えた権益を得ようとした構図から、「汚職」として位置付けられたが、他方で作中の不正輸入は、必ずしも龍馬が故意に犯したものとは描かれない。むしろ、バナナ貿易の断念という結果に重点が置かれている。この点は、貿易という点からすると、「商売ちゅうものは、自由競争でやらんならんに、日本が、勝手に戦争に敗けて、そないな、ケツタイな法律づくりよって…」(『バナナ』, pp.326-327)とあるように、戦後日本経済の不安定による自由貿易の阻害への批難として描かれた特徴がある。

4. 2. 2. 2. 華僑内の諍い

バナナ貿易の断念という展開はまた、上述の当時の貿易体制に対する異議と背中合わせに、龍馬の物語の角度からは、貿易を介した越境の自由を阻まれる現実が強調されているといえる。では、越境する華僑像を体現しようとする龍馬が、そうした現実と直面する顛末はどのような意味を持つのか。この点については、龍馬が不正輸入事件に巻き込まれる契機が重要な点になっている。現実の事件では、華商が不正に参入した経緯は明確にされていないため、『バナナ』において特に脚色が加えられた部分といえる。作中で、龍馬は同じくライセンスを持つ在日台湾人華商・張許昌に唆され、違法行為と知らずに不正に加担するが、張が教唆を行った動機は、龍馬の父・天童が自身を破って「中華民国東京総社」の会長職に選出されたことへの不満として描かれている。不満の背景については、裸一貫で戦後日本での成功を掴んだ張自身による富裕家庭出身の天童に対する嫉妬が描かれると同時に、策謀の過程では、天童が中国からの留学生への金銭支援を華僑内新聞にリークする等、政争としての性格が強く出されている。つまり、作中では不正輸入事件が華僑内の政争の一部として描き変えられた事になる。では、こうした描写は、作中でどのような意味を持ったのか。作中での在日台湾人華僑像には、越境者という点で、国家・政治から俯瞰的な立ち位置にあるコスモポリタンとして描かれた点を既に指摘したが、最終幕での顛末は、これがあくまで「理想」であるという乖離を示しているといえる。

作中で示される越境性には常に、ある背景が伴っていた。先述の龍馬の「無国籍」性についても「中国人といっても、北京系でも、台湾系でもないリューチンたちは、その点、世界人みたいに、自由を持ってるじゃないの。」（『バナナ』, pp.288-289）と評されたように、「世界人」であることが重要だったのは、国共内戦という背景で、どちらにも与しないという点だった。つまり、華僑の越境性の「理想」の背景にあったのは、特に東アジアの冷戦下において、中立でいるという点だった。ここでの「中立」は、生活を基盤とした天童の物事の判断に見られるように、必ずしもイデオロギーからくるものではなく、「結果」として描かれているが、これは冷戦状況における当時の日本とも重なる。当時の日本は対立の当事者国ではなかったことで、「雪解け」後に冷戦状況が再度緊迫化し始めていた国際情勢をよそに、むしろ3章で見てきたような「戦後」の終焉、経済の時代の到来というパラダイムが濃厚だったといえる。では、そうした中でなぜ最終幕では敢えて、冷戦状況における「中立」の理想との乖離が描かれたのか。

この点についてはやはり、実際には冷戦状況が当時の日本社会にとって無縁でなかったことが背景にあるといえる。『バナナ』では、華僑社会の動向が日本において、それを端的に垣間見せるものとして選ばれていると思われる。現に、作中の華僑内の政争は、当時の各地の華僑総会での支持政党を巡る分派や、組織の会長職を巡る選挙介入による組織の分裂（陳：2016, p.167）など、同時代の華僑を巡る動向を想起させる。もとより、1950年代におけるバナナ貿易自体が、華僑学校の管轄分化に関与する側面を持っていた（同上, p.174）。このように、同時代の華僑組

織は、冷戦の影響の只中にあり、対立が先鋭化する過程にあった。さらに、こうした冷戦の影響は華僑社会内部のみの問題ではなかった。例えば、大陸の選択肢がない中で台湾への強制送還が行われ紛糾した、在日中国人の集団引き揚げに関する報道(『朝日新聞』1955.11.21 朝刊)など、昭和30年代初頭では日本にとっての「戦後」と、冷戦下の情勢が重なる形で、華僑を介して東アジアの冷戦体制に日本がどのような位置付けにあるかを問われていたことが窺える。これはまさに、日本に暮らすことで「台湾側でもない、大陸側でもない、いわば、海の上に浮かんでる中国人」(『バナナ』, p.323)であるという華商の立場を謳歌しようとする中で、結局は日本の地においても華僑内の政争に巻き込まれざるを得なかった龍馬の顛末と重なる。

結果として、『バナナ』では不正輸入事件を、華商一族を媒介として描き出すことによって、戦後日本経済の未成熟だけでなく、冷戦下の政治対立構図の中にある日本の位置についても寓話的に映し出したといえる。

5. 終わりに - 『バナナ』が描いた戦後日本の過渡期 -

本稿では、『バナナ』におけるバナナ表象が同時代の社会のどのような側面を反映するものであったのかを、作中のバナナ表象を中心に、それに重なり合う4つの観点と合わせて見てきた。

3章では、食通とシャンソンという視点から、この両者がバナナ表象と重なり合いながら、戦前からの時代の流れ、また同時代の日本社会における国際的な政治情勢把握の弱さを反映していた可能性について述べた。バナナ表象史において、鶴見はこの後、経済成長が一段落して「先進国」になった中での日本人の奢りとしてバナナを描いたが、獅子はその前段として、戦前からの連続性に無自覚なままで、経済成長へ向かう中でも、国際的な政治情勢の変化から取り残されてゆく戦後日本の皮肉としてバナナを描いたように見える。

また4章では、そうした国際情勢における日本の位置が、現実起きたバナナ不正輸入事件を華商の物語を介して描くことで、より明確に表現されたことを指摘した。ここでは、バナナ権益をめぐる日本人商人との対比によって、3章で見た日本の戦前から戦後に至る社会変化への認識の薄さが浮き彫りになるだけでなく、さらに権益を持つ者同士の華僑内の政争が組み込まれることで、冷戦下の政治対立とその構図の中の日本の位置についても描き出されていた。

以上から、獅子自身が『バナナ』連載にあたり、バナナを介して見る日本社会の「ムリ」と称したのは、植民地を持った「帝国」としての記憶を戦後に無自覚に持ち越す社会的記憶のあり方に加え、政治経済の面においても、冷戦期の東アジア情勢の渦中で、戦後の貿易秩序の最前線で取引を担う華商像とは対照的に、戦後の新たな経済・政治秩序に乗り遅れた日本の姿であったと考えられる。このような同時代像は、戦前の国際観も混在する、経済成長期前の戦後の過渡期の特徴を反映したものであったと思われる。また、本論で検討してきた文化的な文脈から、政治・経済の文脈に至るまで、バナナがそうした時代像を媒介するものとして位置付けられたのは、戦前からの貿易関係と、戦後における本格的な経済自立前の貿易規制の両方から

影響を受けている存在として、獅子がバナナを捉えていたからだと考えられる。そのように、戦前と戦後の混在した昭和 30 年第半ばの時代を切り出すものとして構築されたバナナ表象が、作中で最も象徴的に示されたのが、3.3.1.でも指摘した、内と外で新旧の異なる様相を併せ持つ「青ブク」のバナナ像であったといえる。

このような獅子におけるバナナ像の構築が、鋭い時代感覚によって成り立ったものであったことは、日本社会におけるバナナのその後から振り返ってみると、より明確に見えてくる。昭和 30 年代後半には国際情勢としての冷戦が激化する一方で、日本は本格的に高度経済成長期を迎え、バナナの価格が下降すると同時に、華僑による特権的貿易という性質は薄くなり、以降徐々に華商のバナナ貿易は作中のような冷戦下の越境性を必ずしも象徴しなくなった¹²。同様にバナナ自体も、先進国の指標となる IMF8 条国に日本が移行したことで、輸入自由化に至り、フィリピン産などが増加して、戦前から一貫して主要な輸入(移入)先であった台湾と必ずしも結びつくものではなく、先に挙げた「青ブク」の社会像は成立しなくなっていった。

また、獅子の社会観察眼という視点から見ると、獅子のバナナ像がこのように戦前からのバナナ輸入業の変化と時代の変化を重ねて、文化的な側面から政治的・経済的側面まで包括的に描きだすことができた背景の一つに、バナナという主題に対する獅子の関心が、小説以前にも随筆で展開してきた戦前の自身の食の記憶から始まっていた点が指摘できる。そうしたバナナの記憶に関する内省の過程を経たからこそ、本論で引用した獅子自身の少年期におけるバナナへの「熱狂」も含め、戦前へのノスタルジーの色濃かった当時の巷におけるバナナ表象に対して、『バナナ』におけるバナナ表象はアンチテーゼの側面を持ったと考えられる。ここからは、獅子の社会観察の評価において、風俗描写が評価を受けている小説群だけでなく、「食道楽」の随筆家という、獅子のもう一つの側面からも総合的に検討される必要が見えてきたといえる。

注

¹ バナナの文化表象を対象とした欧米の研究史の一例としては、19 世紀以降の北米におけるバナナを用いた作品を対象に、帝国支配から冷戦下の覇権に至るまで、アメリカ史をバナナ表象の角度から再考した Lorna Piatti-Farnell(2016)や、チキータ・バナナの CM ソングを対象に、米国において南洋幻想を掻き立てることで、中南米支配を正当化するプロパガンダとして機能したバナナ表象を分析した Cynthia Enloe (2014)の研究など、特に冷戦期におけるバナナ表象と国内外の社会状況の結びつきに焦点が当てられた研究の流れが見られる。

² 「国別バナナの輸入量」『日本バナナ輸入組合広報 HP』（最終閲覧日:2022.9.27）<https://www.banana.co.jp/database/statistics/docs/01bouekitoukei.pdf>

³ 注 2 参照

⁴ 1925 年の内閣情報部発行の雑誌に掲載された「近海郵船」の広告などにも、バナナの絵を背景に「南海の美島/台湾へ」の文字が見られる。参照：内閣情報部『写真週報』63 号, 1925.5.3, p.1, 国立公文書館アジア歴史資料センターオンラインアーカイブ<A06031065800>

⁵ 本稿でのこの語の使用に関しては、『バナナ』の作中での使用を踏まえた上で、何(2015)の定義である「戦後生まれの台湾人を別にして、戦前の台湾出身者が戦後の日本に住みながらも、2つの中国へのアイデンティティ問題に悩んでいた人々の総称」(p.21)に準ずるものである。

- ⁶ この点からは、戦中に大政翼賛会において、獅子自身も関与したと思われる、戦前の「政治に奉仕する生活」(谷:1996, p.128)に対し、花森安治らに見るような「政治に対抗する生活」として戦後に再構築された「生活文化」という戦後思想の一角が垣間見える。
- ⁷ 「日本のシャンソン・ブーム(2)そのピーク 1957 年」『日本シャンソン館 HP』(最終閲覧日:2022.4.15)<https://www.chanson-museum.com/chansoncolumn/2020/10/18/日本のシャンソン・ブーム2-そのピーク%E3%80%801957昭32年/>
- ⁸ 獅子は昭和 28-29 年頃にモンマルトルで、作中でも示唆される日本人歌手・石井好子の公演を見に行き、会話していたことが確認できる(石井:1982, p.8, p.296)。
- ⁹ 当時の『アサヒグラフ』(「バナナの叩き売り」『アサヒグラフ』1646号, 1956)では、「東京でたった1人のバナナの叩き売り」の記事があり、戦後の輸入制限で没落したが、戦前からの伝統を残すため活動している、とある。作中の島村の願望は、一定の現実味があったといえる。
- ¹⁰ 天童についても同様だが、こちらは獅子自身が美術評論家の福島繁太郎をモデルとしたことを明かしている(「吳天童逝く/福島繁太郎氏を悼む」読売新聞.1960.11.12 夕刊文学 7頁3段)。その際も、福島への評価は「最もすぐれた良識と、最も健康で、合理的な生き方」に向けられ、獅子はそれを天童の造形に生かした理由を「彼があまりに良き日本人であることは、かえって、日本人ばなれがして、むしろ、生来の中国人に近いところさえあった。」と述べている。
- ¹¹ 江戸期の《狂言記拾遺》卷之四《茶盞拝》のパロディーで、日本で暮らす日本人の妻と漂流者の唐人夫の掛け合いで展開されるが、原作との相違として、唐人を野蛮人扱いする妻に対し、文化人の叔父が唐人こそが日本の文化の礎と説き、日本文化の奇妙さを講釈する点がある。
- ¹² 蓮舫氏の母によれば、バナナ貿易商の蓮舫氏の父は、18歳当時帰化を迷っていた娘に対して、「これからは世界を飛び回らないといけない。中国籍だと行けない国があるが、日本国籍であればどこでも行ける」とアドバイスしたという(p.23, 「台湾バナナで大きくなった「仕分けの女王」蓮舫 42年「成り上がり伝説」」『週刊文春』52(17), 2010.4)。

引用文献一覧

底本：獅子文六『バナナ』中央公論社,1959

赤嶺淳編著『バナナが高かったころ』新泉社, 2013

蘆原英了『シャンソンの手帖』新宿書房, 1985

石井好子『思い出のサンフランシスコ 思い出のパリ』旺文社, 1982

猪俣良樹『黒いヴィーナス/ジョセフィーヌ・ベイカー/狂瀾の1920年代、パリ』青土社, 2006

鵜飼哲夫「解説」獅子文六『バナナ』筑摩書房, 2017, pp.422-427

Enloe, Cynthia. *Bananas, Beaches and Bases: Making Feminist Sense of International Politics*, 2nd ed., University of California Press, 2014.

何義麟「戦後日本における台湾人華僑の苦悩：国籍問題とそのアイデンティティの変容を中心として」『大原社会問題研究所雑誌』679, 2015

兼常清佐「たべもののこと/すまいのこと」『美しい暮らしの手帖/第1号』暮らしの手帖社, 1948, pp.37-38

古関喜之「台湾バナナと日本：繁栄したバナナ産業の記憶」『国際観光学研究』1, 2021, pp. 74-82

ダン・コッペル著、黒川由美訳『バナナの世界史』太田出版, 2012

ハインツ・グロイル著、平井正・田辺秀樹訳「フランスのシャンソンと絶対主義政治」『キャバ

レーの文化史 I 道化・諷刺・シャンソン』ありな書房, 1983, pp.28-37

獅子文六「バナナ禅語」『獅子文六全集第十四巻』朝日新聞社, 1969 収録（初出：獅子文六『随筆/山の手の子』創元社, 1950）, pp.150-152

獅子文六「日本敗れざりし頃」『オール読物』10(2), 1955.2, pp.26-35

獅子文六「バナナの皮」『獅子文六全集第十五巻』朝日新聞社, 1968 収録（初出：獅子文六『その辺まで』朝日新聞社, 1961）, pp.33-36

高木一也『バナナ輸入沿革史・正』日本バナナ輸入組合, 1967

谷和明「生活文化概念の史的検討—大政翼賛会の生活文化運動をめぐって—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』(23), 1997, pp.117-136

谷ヶ城秀吉「戦間期における青果物流通機構の形成と「帝国」：台湾バナナを事例に」『立教経済学研究』63(3), 2010, pp.89-118

陳慈玉「台湾バナナ産業と対日貿易：1912-1972年」『立命館経済学』59(2), 2010, pp.158-178

陳來幸「在日台湾人と戦後日本における華僑社会の左傾化現象」陳來幸, 北波道子, 岡野翔太編『交錯する台湾認識：見え隠れする「国家」と「人びと」』勉誠出版, 2016, pp.165-180

鶴見良行『バナナと日本人』『鶴見良行著作集 6』みすず書房, 1998 収録（初出：1982年）, pp.1-134

中村哲夫『移情閣遺聞/孫文と呉錦堂』阿吽社, 1990

花田清輝「芸術としての刺青」『花田清輝全集第十四巻』講談社, 1978 収録（初出：1970年）, pp.391-403

Piatti-Farnell, Lorna. *Banana: A Global History*, Reaktion Books, 2016.

松浦章「日本統治時代産バナナの海外搬出」『關西大學文學論集』(66), 2016, pp.25-61

森永卓郎監修『物価の文化史事典—明治・大正・昭和・平成』展望社, 2008

—新聞記事一覧—

「バナナ/外貨と生活果物輸入額の九割/利権のヒモでバカ高値」『朝日新聞』1957.7.27 東京/朝刊 4 頁 1 段(11)

正宗白鳥「バナナを読んで/正宗白鳥」『読売新聞』1959.9.12 夕刊/文学 3 面 4 段

獅子文六ほか「次の朝刊小説バナナ」『読売新聞』1959.2.14 朝刊文学 9 面 3 段

河盛好蔵「獅子文六著「バナナ」感服させる幕切れ」『読売新聞』1960.1.14 夕刊学術 3 面 2 段

「七被告に罰金/バナナ不正輸入事件に判決」『朝日新聞』1960.10.4 夕刊 5 頁東京 3 段 83 頁

「天声人語」『朝日新聞』1957.8.31 東京/朝刊 1 頁 12 段

「三人を取調べ/全バ連不正輸入」『朝日新聞』1957.11.28 東京/夕刊 5 頁 10 段

「華僑総会で声明書/興安丸出港中止（中国人乗船拒否）」『朝日新聞』1955.11.21 朝刊 7 頁